

経済地理学の空間理論理解をうながすゼミ指導求めて—— 学生とともに13年続く「海外巡検」



2003年：イルケシュタム。天山山脈の分水嶺を越え、タリム盆地側に入った所にある第一検問所（キルギス側）。国境はここから車で20分の先にある。



2000年：サトキラ（バングラデシュ）。日本の民間援助で運営されている小学校の児童たちと学生。



2005年：コソボ。博物館にある戦闘で使われた迫撃砲を調査する学生たち。漢字を発見、中国製とわかった。



1996年：克蘭ツ駅頭の情景（ケーニヒスベルク）。戦前のドイツの建物の前を、郊外電車を降りたロシア人たちが往来する。



2004年：ブラジル。日系人がセラード高原で開発した果てしなく続く綿花畑で元気いっぱいの学生たち。

海外のフィールド経験が、 学生の探究心を刺激する

何もない、大平原のように均等な平野で経済活動が行われたとき、そこに、都市集積や土地利用の差異という空間的な不均等性が自然に生まれるでしょうか。

生まれるのです。これを、経済・社会と、空間との関係から説明するのが、私のやっている学問です。私は、「経済・社会への空間の包摂」という経済地理学の空間理論を構築し、講義「経済地理学」のテキストである『経済・社会の地理学』（有斐閣）などに提示してきました。

一橋には、地理が好きで来る学生が毎年います。私は、領域・境界・距離・空間統合・集積・建造環境など、経済地理学の空間理論がもつ基本概念を生かしたゼミ指導をどう展開したらよいか、はじめのうちずいぶん模索しました。外国の本を読ませても、あまり学生の目は輝きません。

経済地理学は、空間理論を探索すると同時に、フィールドでそれを確かめる学問でもあります。あるとき私の研究フィールドである香港の話をしましたら、行ってみたいという声があがり、皆で、中国返還を控え不安たれこめる香港や、経済特区として開発が進み始めていた深圳を視察しました。今から17年前のことです。これはその後、92～94年まで計4回続きました。

海外の知識は書物からだけ得ていた学生にとって、自身で海外のフィールドを経験するインパクトは大きかったようです。学生は大きく変わり、「将来の生き方が見えてきた気がする」と言う学生もいました。

このなかから、これをゼミ活動の中心プロジェクトにしたいという課

題意識が芽生えてきました。地理学や地質学で学術的な現地視察を「巡検」といいます。これにならない、私のゼミでもこれを「海外巡検」と呼ぶことにしました。

96年より、巡検レポートのweb配信をスタート

95年には、日本工業大で経済地理学を担当された竹内淳彦先生のゼミからお誘い頂き、現代財閥の拠点の蔚山、ソウル周辺の工業開発地区など、韓国と一緒に視察しました。

翌年からはプロジェクトをさらに発展、私自身も初体験の場所を目的地に含め、成果をwebで広く配信するようになりました。これに際し、93年夏、ゼミ学生有志とピルマを訪れて英国植民地主義の遺構と鎖国経済を視察し、また94年の夏に市場経済が導入されたばかりのポーランドとチェコで社会主義の都市空間と産業をつぶさに見た経験とノウハウが役立ちました。

96年は、ソ連解体直後のバルト三国などに学生を連れてゆきました。リトアニアの国会前にはソ連軍戦車を阻止したバリケードがそのまま残り、1945年からソ連支配下で外国人立入禁止となったケーニヒスベルクの、カントも一生を過ごしたドイツの面影が残る姿は、痛ましいものでした。

webは、共同研究室のPCに米国製ソフトを入れ、サーバに仕立てて配信しました。普通のPCを24時間稼働させたので、いつダウンするかひやひやでしたが、FM/Vはよく働いてくれました。まだ大学公式ウェブサイトをすら無かった頃です。この年は、一部だけ学生に作らせ、全体報告はすべて私が書きました。

97年はタイとラオスに行きました。そして、カナダ極北部の先住民イヌイットの生活領域と資源開発との葛藤などの問題を学んだ98年から、ホームページは、ゼミ討論をふまえ、学生に署名原稿として書かせることにしました。

テーマと目的地は、学生が決めます。ベトナムと中国に行った99年まで、前年度末に新4年が決めていましたが、2000年からは、4月に新ゼミ生がプレゼン競争で決めるシステムにし、学生のモチベーションはさらに高まりました。

ゼミは、主・副・そして基礎ゼミ生が一体です。他学部生も多くなります。そこには、学年という縦の壁も、学部という横の壁もありません。2000

年には、優秀な2年の女子が、マイクロクレジットとNGOを勉強したいと提案、全ゼミ生を説得して、バングラデシュなどに行きました。

農村の女性に融資し起業させるマイクロクレジットの目論見ですが、年利は15%超のサラ金なみで、5人組の連帯責任で返済します。出発前の夏学期には、訪問国の歴史・経済・政治を、合宿も交えゼミで十分に勉強します。マイクロクレジットを肯定的に評価する文献も多かったのですが、フィールドで現実を見た学生の間には、疑問がわき起こりました。これは、私にとっても重要な知見でした。

未だ見ぬ地に赴く舞台裏の準備に、蓄積したノウハウ

目的地がどこに決まるか、私自身も4月まで予測できません。遠方の外国に下見には行けません。学生には厳しい予算制約もあります。このような条件下で巡検を準備するノウハウは、回を重ねるにつれ蓄積してゆきました。

行き先が決まるとまず、世界的に定評あるガイドブックLonely Planetなどで概要をつかみます。次に、学生から提案が出た訪問地をうまく結んでルートを決め、現地の宿や乗り物の手配をし、現地企業・諸機関のアポをとります。

手配は、現地旅行社をみつけ電子メールで直接交渉です。旅行社は基本的に各国別なので、訪問国が増えると交渉する旅行社数が増して大変です。メールを出しても、現地からすぐ返事は来ないことも多く、そのときはしばらくおいて国際電話します。やっと価格提示にこぎつけても、高すぎれば他社と交渉のやり直しです。05年にバルカン方面を巡検したときは、マケドニア・アルバニア・コソボを担当してくれる適切な価格の会社がなかなかみつからず、契約成立は出発の2週間前でした。契約後、学生から旅費を集め、私が海外送金します。一般に米ドル建ですが、バルカン巡検ではすべてユーロ建で、新たな基軸通貨として台頭するユーロを実感しました。アポとりは、現地旅行社に任せることも、私から直接することもあります。

こうした舞台裏の仕事は煩雑を極め、学生には任せられません。すべて私が1人でやります。

準備や現地で、これまで、如水会サンパウロ支部とバンコク支部・日本・スロヴェニア友好協会・日本ブラジル中央協会・海外技術者研修協会をはじめ、諸団体や関係の方々にお世話になりました。この場を借りあつく御礼申し上げます。

準備がすべて調うと、それだけで肩の荷がたいぶ下り、ほっとします。

安全対策、トラブル対策に最善の注意をばらう

現地に出かけるのは、航空運賃がシオルターになった8月下旬から9月上旬です。現地では基本的にすべて英語でコミュニケーションをとります。英語が通じにくい地域では、出発前に私が現地語を数ヶ月かけて勉強することもあります。ロシア語、ポルトガル語などは、成果が現地でそれなりに役立ちました。

英語という学生は驚きますが、一橋生だけあって、単語・文法力は多くの学生にあります。無いのは、英語でコミュニケーションをとろうという意欲と度胸ですから、現地でしばらくすると、慣れてきます。

費用対効果を効率化するためきつめの行動日程にもかかわらず、ほと

んど学生は体調も崩さず、最後までしっかり日程をこなします。一日の行動が終り、夕食の食卓を囲みながらの現地ゼミもよくあります。

海外での安全は、予想されるトラブルと対策をまとめた、11ページに及ぶ印刷物を配り、出発前によく説明します。効果はてきめんで、これまでトラブルに巻き込まれた事例は全くありません。

「境界」がテーマの1つであることもあり、国境はできるだけ陸路で越えますが、これが厄介です。旅行社の経営が国単位なので、辺境の国境越えは多くの場合自力でなくてはなりません。係官は往々にして腐敗しています。それだけに、難しい国境越えを無事こなし達成感は、かなりのものです。キルギスから天山山脈を抜けウイグル自治区（中国）に入ったイルケシュタム越えは、一生忘れられないでしょう。

巡検は、現地集合・現地解散です。解散後、バックパッキングの自由旅行に挑戦する学生もいます。安全に解散できると私は2度目にはっとします。

巡検の目的は、その背景にある経済・社会とその空間関係の洞察

現地に行くのは、視察やインタビューで資料や情報を収集するためです。旅行自体が最終目的ではありません。

冬学期になると、毎週のゼミで、学生が用意する巡検報告書草稿を、1日につき4～5時間かけてじっくり検討し、ホームページの原稿を作ります。その成果は、<http://econgeogmisc.hit-uac.jp/excursion/>でご覧いただけます。意欲ある前期学生が書いた学年末チームペーパーは、私が学内誌『一橋』に推薦し、しばしば入選しています。

学生は、現地で聞いた話はまとめられても、フィールドで観察して主体的に何かを見出すのは、まだ苦手なようです。ゼミでは、可視的なものの背後にある経済・社会とその空間関係を洞察する鋭い目をもて、と常に学生に言い聞かせています。

私のゼミは、ハードが得るものは大きいという評価が定着しているらしく、覚悟して門をたたく学生は個性にあふれています。ある年度は、全員が後期日程入学者でした。申し合わせたわけでもなく、1クラスしかないロシア語選択者が大多数を占めた年もありました。

1年間が終わったとき、ゼミに参加し意義があったとお世辞でなく感謝の言葉をかけてくれるのは、専門分野で学生という珠を磨くことを職務とする教師冥利に尽きる思いです。基礎ゼミ修了後に如水会短期留学生になったり、卒業後に国際関係の仕事に就いたりする学生もいます。

これからも、ゼミ学生とともに海外各地に赴き、一橋大学の国際化に、微力ながら貢献したいものです。



経済学研究科教授

水岡不二雄

Fujio Mizuoka

1951年生まれ。1975年立命館大学経済学部卒業。1977年一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。1979年から1981年まで香港大学文学部地理及地質学系で教鞭をとる。1986年クラーク大学地理学部大学院（フルブライトプログラムによる留学）よりPh.D.（地理学）学位取得。1987年一橋大学経済学部助教授、1992年同教授。経済地理部門所属。